



研 究 開 発 雑 感

理 事 小 野 勲
研究所長

企業における研究開発は、その企業の現在および将来の収益を確保するためにあるということには誰も異論は無いでしょう。オイルショック以後、化学工業のような素材産業は原料高・製品安のため各企業ともに収益低下に苦しんでいます。それだけに研究開発への期待も大きく逆に風あたりも強くなってくるように思われます。

自動車や弱電関係の企業は現在非常に高い収益を誇っていますが、考えてみれば石油化学工業も数年前までは花形産業の一つであったわけです。高度成長時代に量産効果を追求することに熱心のあまり、資源や環境への配慮が充分でなかったこと、またファインケミカルズの展開、あるいは加工産業や組立産業分野への進出の準備をおこたったことが、現在の苦況の原因の一つであったと言えるかもしれません。結果論であると言えればそれまでですが、この教訓を今後の研究開発に是非生かすべきだと思われま

す。

新価格体系への移行は遅々として進まず、化学工業の低収益は今後も相当長期間続くと思われま

す。一般に利潤が減れば技術も低下すると言われていますが、一度低下した技術は短期間に再び昔のレベルまで回復することは、非常に困難であると考えられます。したがって技術開発力の強化育成を計るとともに量から質への転換を真剣に考えなければなりません。

私達日本人は欧米人に比較して主体性が無いとよく言われます。確かに私達の判断基準は自分自身よりも他人との比較に重点を置く傾向があります。他人と同じであれば安心し、違っていればなんとなく不安です。逆に欧米人は強く自己主張をし、いかに他人より優れているかを誇ります。主体性のない研究開発は模倣追従を繰返すだけで決して国際競争に勝てる新技術を生み出すことはできません。立派な業績を挙げた人はすべて自己の哲学を持っていたように思われます。自己の能力や目標に対して強い自信を持つことがなによりも大切な事と思えます。

そのためには規模の小さい研究開発でも独創性のあるものは積極的に推進し、事業として成功させること、そしてその体験を積み重ねることが必須条件であると思うわけです。

世の中は急速に変化しておりますが研究開発の本質が変わったわけではありません。しかし価値感も著しく変わり市場のニーズも変化しています。したがって、世の中の動き、時の流れを長期的な見方で判断し、計画性のある研究開発を志したいものです。大型の素材製品については将来後進国の追上げが必至であり、そのために革新的な省エネルギー、省資源プロセスの開発が強く要望されています。

また一方では特殊な機能製品の開発の必要性が叫ばれ、明日はライフサイエンスの時代だと期待されています。既存事業を防衛するための研究開発と新規事業へ挑戦するための研究開発とはその重要性を比較できるものではありません。企業の体力・体質を基礎として長期計画的な判断によって決められるべきものでしょう。

最初に述べましたように今後の研究開発の道はきわめて厳しいものと覚悟せざるを得ません。しかし他に妙手妙案を期待しても無理な相談です。研究開発に関係する一人一人が強い自信を持ち目標に向けて地道な努力を続ければ、道は必ず開けると信じている次第です。